

異常値の出るメカニズム 第6版

河合 忠, 屋形 稔, 伊藤 喜久, 山田 俊幸 編

ルーチン検査の活用には本書の活用が欠かせない

信州大学教授・病態解析診断学

本 田 孝 行

“検査値を読みたい”という衝動に駆られたことはないだろうか。その知的好奇心を十二分に満たしてくれるのが、河合忠先生、他編集の『異常値の出るメカニズム 第6版』である。1985年に第1版が発売され第6版を迎えるので、超ロングセラーに間違いなく、医療従事者にとって検査値を読むためのバイブルといっても過言ではない。第5版から5年目の早い改訂であり、河合先生の意欲が感じられる。

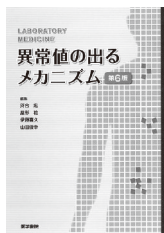
ルーチン検査(基本的検査)は血算、生化学、凝固線溶および尿検査などを含んでおり、世界中で最も頻繁に行われている。臨床検査部では正確な検査結果を返そうと努力しているが、患者の診断、治療に必ずしも十分に活用されているとはいえない。最大の理由として、ルーチン検査を読む教育が十分でないことが挙げられる。AST、ALTが上昇すれば肝機能が悪い、UN、クレアチニンが上昇すれば腎機能が悪いなど、ごく表面的な浅い解釈にとどまっており、患者の病態を深く追求できていない。結果として十分に活用されない検査が大量に行われており、医療費の無駄遣いともいえる。

ルーチン検査では、1つの検査で1つの病態を解釈することは不可能である。複数の検査を組み合わせその変動を検討することにより、詳細に患者の病態が捉えられる。まず、全身状態、そして各臓器の病態を把握していくので理学所見をとるのに似ている。ただ、複数の検査項目を結び付けて考察する必要がある、各検査の異常値の出るメカニズムを熟知していなければならない。

本書以外に、個々のルーチン検査の異常値の出るメカニズムについて詳細に解説している本を知

らない。検査値を読みたい、すなわち、ルーチン検査を十分に活用したいならば、本書を活用するしかない。信州大学医学部病態解析診断学では、16年前から本書を教科書としてR-CPC(Reversed Clinicopathological Conference)の授業を行っている。私はR-CPCを始めるころに本書に出会い、授業で本書の内容を学生に伝えられれば十分だと直感した。10回以上本書を精読した後、R-CPCの授業を始めたころを昨日のように思い出す。今でも、ルーチン検査でわからないことがあれば本書を開いている。

河合先生は、第6版の序文で“artの部分の修練”という言葉を使用されている。本書で検査値を読む修練を重ねることにより、検査に振り回されるのではなく、検査を道具として自由に操れるartistになれという意味だと勝手に理解させていただいた。遺伝子検査や腫瘍マーカー(カットオフ値があるのでデジタル検査と呼んでいる)は切れ味のよい検査であるが、患者の全身状態を捉えることはできない。ルーチン検査(アナログ検査と呼んでいる)は、直接診断につながらないが病態の変化が捉えられる。検査にはそれぞれ使い方があり、本書により各検査の異常値の出るメカニズムを十分に理解し、多くの検査のartistが誕生することを期待する。



●B5 頁480 2013年
定価6,300円
(本体6,000円+税5%)
[ISBN978-4-260-01656-8]
医学書院刊(☎ 03-3817-5657)